

インターネット公開許諾のない作品には墨塗り処理をしています。

冬

財 前 義 見

白い颯^{ハヤテ}は燈臺を毀し、岬にさ迷ひ墜ちる候鳥の白影^{カゲ}に、環状^{トリマ}く季節の城砦に龜裂の弔詞を刻んだ。

子午線に眠る兵士の屍の夢^{ドリーム}に、幽閉された氷室の露帝^{ツァー}は、喪失^{ウシナ}つた王冠への惜別^{ウシナ}に、白い魚骨の同情を投じた。

遠く氷原に衍^{ハフ}する革命、情熱^{バツション}を呼ぶ青白い三日月に、玉座を狙ふ轉變の狼。

赤い莫斯科^{モスクワ}、ペチカの消えた瘦せた童話^{エンペ}に搖れる孤獨な鞆^{タン}の影^{カゲ}に、ちかちか光る北氷洋^{アルクティカ}の哀愁。

故園をつなぐ廢船^{コリス}の航路に、毀れた化石の鷗のこぼす郷愁^{ノスタルヂイ}、白い颯^{ハヤテ}が烙印する拒絶の解纜。

秋 風 語

秋

扇

白い頁の上に日射を浴びて小猫が一匹坐つてゐる
をんなは織い手を翳して情い白秋の海を眺てゐた

虔

群踏れて恒河の汚水を頂汲む

盲いた無智の闇浮提に瞥ける奇審ミ愍は恐れもなく

三千年——心象の部落の惰眠れる地床を尖く

鈍のやうな經典の吐慄

悲

歌

ひねもす、古傷を縫つてゐる秋のミシン

異國風の哀唱

公爵の穴のある胸に光るのは飢しい夕暮の港であつた
くるり、くるり、灰白くくゞつて消える

二十鼠の銀の音譜

月 韻

雁の糞、墓石に白く

ほろほろこ

古里の音信ありやなしや

郭註莊子

高 橋 輝 雄

傀儡の身の支離疏があゆみふりかへりあざけり得ねば頸かしけ傍つ

人間世

烏玉の黒牛裂くミ手の双ひらめきながれ月冴ゆるべし 養生主

たまきはる精神來古は馬になりこれぞたぬしミ子輿はたのしむ 大宗師

白砂に打ち据えし石のなすちから迫まれるゆゑに晝のしづけさ 相阿彌庭

ころころにころける鐵の火を見ればいくさをなさむころかなしき 舞鶴軍港